

メダカ町

長良中学校 3年 伊藤 陽慶

私は実家の祖父の家に来ていた。祖父が突然いなくなつたと連絡があつたので、様子を見に来たのだ。祖父の家は山の近くで、そこその大きな庭があつた。その庭の端には「メダカ町」という名前の綺麗な池があつた。その周りは金網で囲われていて、祖父はよく池に行つてはニヤニヤした顔でエサをやつていた。その姿を私も目にしていて。その池は祖父が、この土地を買うより前にあるらしくそこに住んでいた人も突然消えていたらしい。私はその池がとても不気味に思えた。何を飼っているのかと聞いても、祖父は「池には入るな」の一点張りだつたので、私はずっと気になつていたので。

ある日私はふと、そういえば祖父がいなくなつてからエサやつてないなと思ひ、祖父がいつも持つて行つたエサを手に取り池の方に行つた。金網をこえるとそこはまるで別空間のようで、池は底がくつきり見えるように綺麗だつた。底を見ると、結構な数のミニチュアの建物があつた。家や学校、公園などのものがたくさんあつた。私は不気味に思ひ早くエサをやつて出てしまおうと思つた。

私がエサを入れた瞬間、数百匹のメダカが一斉に家から出てきた。私はとても驚き、尻もちをついてしまつた。そして、なんとメダカたちは一列に並びエサを受け取り、再び家に戻つていった。私はその光景が不思議に見えたのと同時に興味をもつた。

それからというもの、私は池に毎日通ひエサをやつたり池の掃除をしたりした。メダカたちも新しい人に慣れたのか、私が居ても家から出て学校や公園に行くようになった。その中の一匹のメダカが私に話しかけているように見えたが当然私には聞こえないし言葉もわからなかつた。しかしとても面白い。これなら祖父がニヤニヤしていたのも頷ける。私はこのメダカにますます興味を持つたので、観察日記をつけることにした。

観察日記を付けてから二週間ほどたつて、発見したことが三つあつた。一つ目は新しくメダカを入れてもそのメダカは普通のメダカだということ、二つ目はこのメダカには感情があることだ。例えばエサを豪華にしたらあからさまに喜んでくれた。

三つ目が一番重要なことだ。それはこのメダカたちはとても人間らしいということだ。それらの観察から私は一つの仮説を立てた。それは、「このメダカは普通のメダカではないこと、もしかしららもともと人間だつたのではないかということ」だ。もし本当に人間がメダカになるならそれは大発見だ。現実にそんなものがあるはずがない。まだ観察を続けることにする。

「今日の観察もこの辺にするか」

気がつけば日が暮れていた。夢中になつていたので全然気づかなかつた。ここは森に近いから

暗くなると足元がまるで見えなくなる。私は急いで立ち上がろうとした。しかし足が痺れて力がはいらずに池めがけて転倒してしまった。盛大に水飛沫が上がった後そこに「私」の姿はなかった。私は体がどんどん小さくなる中で直感的に感じた。祖父もこのように行方不明になったことを。

そして「メダカ町」の住民がまた一人、いや一匹増えていった。